全国 硫黄島 会報

いおうとう とうみんのかい

通巻 第4号 2024年発行
発行 全国硫黄島島民の会
編集 島民三世の会

My Roots is Iwoto Islands.

二〇二四年、最新の《硫黄島》をお届けします。

「擂鉢山（すりばちやま）」とともに硫黄島の象徴的な場所「硫黄ヶ丘」。戦前はレモングラス、硫黄の精製工場があったほか、島に近づいてくる船を見る高台「船見岩」（写真後方）があった。今も高温のガスが噴出している。2023年（令和5年）8月撮影

夏の硫黄島、木陰に吹く涼しい風。大きなガジュマルの木などが作る木陰が太陽を遮り、また台風などの雨風を防いでくれた。撮影西村

硫黄島、遺骨収集に参加して

硫黄島旧島民三世（孫の世代）である当会会長 西村が戦後七九年の島へ

二〇二三年七月中旬から下旬にかけての九日間、硫黄島の遺骨収集フォローアップに参加しました。本来、フォローアップを含む硫黄島の遺骨収集の日程は十四日程度ですが、今回は短期間の日程となっており、有給休暇の取得ができ、参加が叶うことになりました。

二〇二三年の七月は、首都圏は連日四〇℃に迫る大変な猛暑でした。ただでさえ暑い南の島の硫黄島、どれだけ暑いのだろう、と心配もありましたが、実際に硫黄島に着くと内地と比べて意外にも涼しく感じられました。そういえば、生前祖母が言っていました。「硫黄島は日陰に入ると涼しい風が吹くんだよ。」確かにその通りだ。戦前は本当に南の楽園だったのだろうな、と到着早々に改めて感じることができました。

遺骨収集フォローアップとは、実際に遺骨収集をする前に収集予定の場所を調査するというのが役割になります。戦後八〇年近く経つと、地表にご遺骨はありません。また、壕の入口のほとんどが戦時中または戦後に米軍により埋められてしまったため、

夏の硫黄島、強い日差しが照り付ける日向（ひなた）。撮影西村

現在は入口さえ地下に埋没しています。重機で地面を掘り下げ、入口を見つけると、次は有毒ガスの有無や落盤の危険などを調べながら慎重に収容を進めます。これは想像を超える困難で時間のかかることです。

滞在中、前の遺骨収集メンバーらが収容した遺骨の洗骨も行いました。焼骨する前の遺骨を目にするのは初めてでしたが、この骨が一人の人だったんだと思うと、なんと言いますか、「やっと会えましたね」というような、非常に不思議な感情になりました。怖いという感覚は全くありません。同時に、遺骨収容は大変な事ですが、やはり今後も戦争の代償としてずっと続けていかなければならないだろう、という思いが湧きました。

戦時中、島へ赴任したばかりの日本兵の手記に、連日空襲にさらされながら防空壕の陣地構築をする中、「空襲の止んだ夜、ふと空を見ると星空に吸い込まれそうなくらい美しい夜空があった。」という記述がありましたが、今回の硫黄島滞在中に、まさに同じような情景がありました。

今の硫黄島は平和な島です。一度、激戦地になった場所だからこそ、今後は平和を祈る場所であってほしい、と思うのでした。

全国硫黄島島民三世の会会長　西村怜馬

遺骨収集事業（いこつしゅうしゅうじぎょう）とは

厚生労働省が進める戦没者慰霊事業の一つで、海外諸国などに放置されたままになっている第二次世界大戦における戦没者（旧日本軍軍人、軍属、及び民間人）の遺骨を捜索し、収容して日本へ送還する事業のこと。

硫黄島では、日本軍側だけで約二万二千人（米軍側は約六千八百人）が亡くなり、いまだ一万柱近くの日本軍将兵・軍属・軍夫の遺骨が見つかっていないとされる。

一九六八年の小笠原諸島施政権返還後、半世紀にわたって、政府の努力と熟練ボランティアの尽力によって遺骨収集が進められてきた。

本文中「フォローアップ」とは遺骨収集の前段階として収集予定場所の調査等を行う作業のこと。

平成二五年「硫黄島に係る遺骨収集帰還に関する関係省庁会議」設置。同会議によって「取組方針」が決定され、毎年度計画的に取り組みが続けられている。

2016年、硫黄島墓参・父島にて

にしむら・りょうま
二〇一八年より
全国硫黄島島民三世の会会長。
一九八二年生まれ。
祖父・菊池耕一（島民一世）、
祖母・菊池康子（島民一世）の孫。
東京都出身・在住。

企画展

八重山平和祈念館にて「強制疎開―八重山と小笠原・硫黄島」が開催されました

令和六年二月一日から三月三日まで、石垣島の八重山平和祈念館にて「強制疎開―八重山と小笠原・硫黄島」が開催されました。八重山列島と小笠原群島・硫黄列島は、現在の日本国内で、戦時末期の島嶼疎開の経験が「強制疎開」として記憶されている二つの代表的な地域です。

当会顧問の石原俊教授（明治学院大学）監修のもと、小笠原村教育委員会、小笠原協会ほかから多大な協力をいただき実現しました。

「戦争マラリア」八重山では強制疎開によってマラリアに罹患し多くの犠牲者が出た。

【インフォメーション】

1　2022年9月より小笠原村「村民だより」に掲載していただいていました「島民一世への聞き取り」（三世の会が実施）が完結しました。拝読ありがとうございました。

2　年に一度の《硫黄島》同窓会＝「定期総会（島民の集い）」の、第52回（2023年度）、第53回（2024年度）が川崎日航ホテルにて開催されました（写真は第52回、南洋踊りを披露している様子）。

3　2024年1月「戦争、国家、失われた故郷」、2月「硫黄島強制疎開80周年」と2つのシンポジウムが開催されました。詳細は次号でお伝えします。

4　2024年2月、小笠原村の「硫黄島行政視察」に一世 奥山登喜子さんが同行、久しぶりに《硫黄島》へ上陸しました。こちらも詳細は次号でお伝えします。

1

小笠原 村民だより

資料、情報求む！硫黄島に関することでしたら何でも。

ご自宅にございます《硫黄島》に関する文献、写真、映像等どのような情報でも構いません。
現在、『全国硫黄島島民三世の会』では、歴史を風化させないために、貴重な情報を収集し、デジタル・アーカイブ化も含め、次代へつなぐ活動に取り組んでいます。

会員募集！『全国硫黄島島民三世の会』

祖父母の世代が「硫黄島旧島民」でいらっしゃる孫の世代＝三世の皆様へ。2018年に発足致しました『全国硫黄島島民三世の会』では会員を募集致しております。共に学び、語り合い、いつの日か一緒に硫黄島を訪れたい。事務局（電話 047-458-3615、islandvideo1976@gmail.com）まで。お待ちしてます。

全国硫黄島島民の会会報　通巻第4号　2024年7月　発行：全国硫黄島島民の会　編集：全国硫黄島島民三世の会　デザイン：アイランドビデオサービス

墓参

小笠原村主催《硫黄島》訪島事業（墓参）再開へ

記憶も、島も遠くにならないように――

写真と文◎羽切 学
（全国硫黄島島民三世の会、ビデオカメラマン）

7年の時を経て

硫黄島は土地の隆起を続け、かつて海岸線の向こうにあった岩も飲み込まれた

小笠原村が主催する、硫黄島への上陸を伴う「訪島事業」（墓参）が2023年（令和5年）7月26日に遂に、遂に再開されました。この日をどれだけ待っていたか、言葉では言い表せません。

硫黄島旧島民（昭和19年の強制疎開まで硫黄島に暮らしていた人）にとって、現在硫黄島に上陸する機会は東京都が主催する墓参（春・秋各１回）。それに小笠原村が主催する墓参の１回の「年間3回」のみです。都の墓参は、島民１世は優先的に参加できますが２世、３世になると定員の関係で抽選になります。（１世の付き添い参加の場合は参加できます）。

また、それまで船での墓参を行っていた小笠原村主催訪島事業は、2016年におがさわら丸が新調され、大型化した関係で硫黄島沖に係留できません（硫黄島には港がありません）。この為、船舶に代わる手段や他の方法を関係各所が検討しているうちに2020年からは世界的なコロナウイルスの感染拡大（パンデミック）により中断してしまった、という経緯があります。

このように島民関係者にとっても硫黄島上陸は非常に狭き門となり、1世も高齢化しており、今後の墓参の在り方に注目が集まっていました。

報道番組の特集を組まれる

天山（日本戦没者慰霊碑）と平和祈念公園（島民墓地）には必ず訪れる

そのような経緯があり、令和5年度は、自衛隊入間基地より硫黄島基地への飛行機に搭乗して、日帰り墓参が開催されることになりました。旧島民（1世）での参加は3名。1日という限られた時間ではありますが、同行者、現地の自衛隊員の方々も当時を知る1世の方たちから直接お話が聞けることを楽しみにしていました。

また、今回久しぶりの上陸墓参にあわせて、テレビ朝日「サンデーLIVE!!」にて「戦後78年 硫黄島旧島民“里帰り”への想い」として特集放送していただきました。戦前の暮らしから、現在でも変わらない故郷への思いを、当事者へ多数取材していただきました。放送終了後からさまざまな感想が聞かれたのは、ウクライナとロシアの戦争がはじまり、戦争によってそこに暮らす人々にどのようなことが起きるのか、関心が高まったからかも知れません。

新しい島内巡拝

新たに行くことができた「小学校跡地（校門付近）」と「甘蔗圧搾機跡」（写真下）

今までは、旧島民の部落跡のほかに、司令部跡、壕、砲台跡など「戦跡」を見て回っていたルートだったものが、今回からは戦前の「生活跡」が多数加えられました。これには旧島民の皆さんも大変喜ばれていました。まずは「小学校跡地」。一時は分校ができるほどだった硫黄島の小学校の校門と思われる石の基礎部分や、便所の跡などが見られました。「甘蔗圧搾機跡」は村の平和祈念会館のすぐ裏にあり、戦前は牛を使ってサトウキビを搾って、酒などの原料を作っていた機械です。島内には何箇所かに同じような機械があったそうです。そして今までは立ち寄ることのなかった島の南部、千鳥部落でも住居の基礎部分と思われる石が見つかり、みんなで見ることができました。これらは在島自衛隊の皆さんが、戦前の情報（話や資料など）を頼りに時間をかけて木を切り、草を刈り、道を作り、（蜂に刺されたりしながら）整備してくださいました。

小笠原村 渋谷村長より

2021年（令和3年）に逝去された森下前村長は、お母さまが硫黄島出身でした。旧島民や関係者にとっては、いつも寄り添っていただいた思い出があります。そしてずっと以前から硫黄島墓参や事業で前村長の傍らにいらっしゃったのが渋谷現村長でした（当時、村の職員）。今回、長い中断がありましたが、硫黄島墓参のこれからをこのように話してくださいました。

「2022年秋におがさわら丸（船）での訪島事業を断念することになりました。防衛省に代わる方法をお願いしに行ったところ、硫黄島へ向かう遺骨収集団の飛行機に余席があり、それを利用して日帰りでの墓参ができるのではないかと提案されました。まずは今年（2023年）やってみようということになりました。今回の飛行機では村民の枠を40名いただき、中学３年生から20歳までの、これまで上陸できなかった子どもたちを優先に募集をしました。

今回お伝えしたいのは、戦時中の戦跡だけではなくて、戦前の暮らしの跡を見て、戦前の豊かな暮らしがあったことを伝えていきたいんだということです。今、硫黄島にいる自衛隊の皆さんにいろいろ見つけていただいて、今回からそういった場所にも行けるようになりました。
国や東京都、入間基地、硫黄島基地の自衛隊の皆さん、さまざまな方々のご協力で、今回の墓参が実現したことを嬉しく思っています。」

村長あいさつより、2023年7月26日硫黄島にて

想像してみてください

村の子供たちといっしょに島民墓地へ　未来も平和な世の中でありますように

３年以上続いたコロナ禍が収束に向かって、皆さんもようやく実家やふるさとへの帰省をされたと思います。最初は帰省の煩わしさから解放された、なんて思っていたものが2年となり3年となるとやっぱり寂しいものでした。そうやって自分自身（今まではあまり気にすることのなかった）ふるさとのありがたみを知るにつけ、当たり前のように、その故郷に帰れない硫黄島島民の悲しみを感じます。昭和19年に強制疎開で故郷を離れてから、今年で80年経ってしまいました。

はぎり・まなぶ
2018年より、全国硫黄島島民三世の会。1976年生まれ
全国硫黄島島民の会、三世の会が主催する総会や
シンポジウム等をビデオ撮影している
2023年、硫黄島にて

レポート

硫黄島三島クルーズにて 洋上慰霊祭が行われました

写真と文◎羽切朋子（全国硫黄島島民三世の会副会長）

「南硫黄島」は人の定住記録がなく、島自体が天然記念物だ

「硫黄島」摺鉢山沖では洋上慰霊祭が行われた

「北硫黄島」には戦前2つの集落があり、強制疎開後は無人島となっている

2023年7月1日、4年ぶりとなった昨年2022年の洋上慰霊祭に続き、今回は小笠原海運主催の「硫黄三島クルーズ」と合わせて、硫黄島沖にて洋上慰霊祭が開催されました。硫黄島に所縁のない方々も乗船する中で行われた慰霊祭は初のこと。関係者の皆さん以外、慰霊祭への参加自体はできませんが、同じ船内におり見ること、聞くことはでき、どのように感じたか？どのように思ったか？知っていただける機会になったか？と参加しながら思いもしました。

平和な今、なかなか想像が出来づらい今、少しでも知っていただける機会になったらと思い、続いていくと良いと感じました。

洋上慰霊祭とは――平成9年度（1997年）から年１回、小笠原村でおがさわら丸をチャーターし、上陸、宿泊での訪島事業（墓参）を実施してきました。しかし、令和4年度（2022年）、硫黄島および周辺海域の隆起問題等を踏まえた検討の末、おがさわら丸での上陸訪島を断念することになり、以後硫黄島沖からの洋上にて慰霊祭を開催している。

太平洋に沈む夕日と昇る朝日が見えるのも三島クルーズならでは

晴天の硫黄島にて

はぎり・ともこ
2018年より、全国硫黄島島民三世の会副会長。1976年生まれ。
祖母・川島フサ子（旧姓・水口　島民一世）の孫。千葉県出身・在住。